

R2年度 鳥栖市立鳥栖西中学校 学校評価結果

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
西中一心 ～ 夢の根っ子を育てる ～	1 確かな「学び」を鍛える ～ 「活用」する力を育てるための授業改善、教科「日本語」の取組の推進 2 豊かな「心」を鍛える ～ ならない自分を考えさせる生徒指導の徹底(西中三訓、人権教育、部活動指導) 3 健やかな「体」を鍛える ～ 活き活き部活動の推進、生活習慣の確立、命を守る食生活指導の徹底 4 教師集団の「組織力」を磨く ～ チーム「いしごき」(全職員の学校運営への参画、働き方改革の推進、熟練教師の技の伝承と若手、中堅教師の育成) 5 生徒を取り巻く「環境」を整える ～ 特別支援教育の充実、不登校対策の推進、危機管理体制の確立

達成度 A：ほぼ達成できた
 B：概ね達成できた
 C：やや不十分である

3 目標・評価

① 確かな「学び」を鍛える

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	
教育活動	●志を高める教育	自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進ができていますか。	・自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちがある児童(生徒)80%以上にする。 ・授業改善に向け、全教員が授業公開、授業研究会を1回以上行う。	・全ての教科等、学校行事等を通して、夢や目標に向けて自ら考えさせる時間や場を設ける。 ・授業改善に向け、授業公開や授業研究会などとして、相互参観と授業研究会を実施する。	A	・アンケートでは、「自らの夢や目標の実現に向けて努力しようという気持ちをもっている」と回答した生徒は85%であった。 ・教師自身も授業改善に向け、授業公開や授業研究会に積極的に参加することができた。	・自らの夢や目標について具体的に考える場をさらに進めたり、先輩の事例を紹介することを通して、自らの夢や目標の実現に向けて努力しようという生徒の割合を9割にしたい。	
		●学力向上	生徒の基礎学力は向上したか。 生徒の「活用力」は向上したか。	・12月実施の県学習状況調査において、国語、数学、理科については各領域で4月調査の結果を上回る。他の2教科については、県平均を上回る。 ・12月実施の県学習状況調査において、国数理社英の活用力において4月の結果を上回る。	・校内研究の一つの柱として活用力の向上を位置づけ、5教科における活用力を明確にし、授業構成を見直し、年に2回の公開研究授業を行う中で、活用力向上に向けた共通実践を進める。 ・学習規律を確立するとともに、支持的風土を醸成し、学び合う集団づくりを展開する。	B	・12月県学習状況調査では国語と数学においてはほとんどの領域で4月調査を上回ることができたが、英語と社会においては、県平均を上回ることができなかった。 ・年2回の公開研究授業を実施し、全職員で活用力向上に向けた共通実践を進めることができた。 ・12月調査では、国語と数学の活用力の問題において4月調査の正答率を上回ることができた。	・次年度は、今年度の取組をさらに活性化させて、12月の県学習状況調査において5教科すべてで前年度を上回る。また、5教科の活用力においても前年度の正答率を上回る。
		・校内研究において、各教科における「活用力」の向上に向けた取組を、横断的・総合的に展開することで、生徒にとって「わかる授業」「ためになる授業」が実現できたか。	・授業評価アンケートで「授業がわかる」ためになる」と回答する生徒の割合を80%以上にする。	・活用力の向上に向けて全職員が参加する授業研究会や校内研修を通して推進し、横断的・総合的な視点から授業構成を見直し、共通実践を進める。 ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業について共通実践を進める。	A	・アンケートでは81%の生徒が「授業がわかる」「ためになる」と回答した。 ・授業研究会や校内研修を通して、教科における活用力を明確にし、授業構成を見直し、共通実践を進めることができた。 ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業について、共通実践を進めることができた。	・教師が互いにペアをつくり、互いの授業を見せ合う等の授業改善に取り組み、「授業がわかる」ためになる」と感じる生徒を9割にしたい。 ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の実践に努め、教室環境や個別支援のあり方をさらに進めていきたい。	

② 豊かな「心」を鍛える

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	生徒行動目標である「禮(礼)を正し、時を守り、場を清める」が実行できているか。	・「明るい挨拶ができる生徒を80%以上にする。 ・時間を守り行動できる生徒を80%以上にする。 ・時間いばい、一生懸命に掃除をしている生徒を80%以上にする。	・全校、学年、学級、部活動などすべての教育活動を通して、習慣化を図る。 ・学校行事や体験活動に向け、集中した取組を行う。 ・常に教師が清掃場所に立ち会い、無言清掃に率先して取り組み、生徒に達成感を味わわせるとともに掃除への意欲を高める。	A	・アンケートでは「明るいあいさつができています」と回答した生徒が85%、「時間を守る行動ができています」と回答した生徒が88%、「時間いばい」掃除に取り組んでいる」と回答した生徒が87%であった。 ・すべての教育活動を通じて習慣化に取り組みるとともに、教師自らが率先して取り組むことができた。	・朝のあいさつだけでなく、授業の前後、帰りのあいさつ、廊下ですれ違う場面など、多様な場面で「あいさつ」についても具体的な指導の充実を図りたい。 ・無言清掃については、清掃前後の集会を行うなど、無言清掃のさらなる徹底を図りたい。
		●心育	体験活動や奉仕活動を通して、心が育っているか。	・1年生では音楽鑑賞や絵付け体験、2年生では職場体験、3年生では赤やんスワッチ事業を位置づけ、全校一斉実施間かせや、外部人材の活用や交流を通して、自分自身が成長していると感じている生徒を80%以上にする。	・生徒が自己を見つめ、成長していくように、活動や体験後の取組を充実させる。 ・体験活動や奉仕活動の様子を生徒会役員を中心に積極的に外部へ発信する。	A	・アンケートでは、「体験活動を通して、自分自身が成長している」と回答した生徒が86%であった。 ・各学年において事前事後を含めた取組の充実が見られた。
教育活動	●いじめ問題への対応	いじめの早期発見・早期対応に向けた体制づくりができたか。	・いじめ防止の観点に基づき、相手思いやり受け入れる態度を有していることを100%にする。 ・SCやSSWと保護者・担任との連携が十分できていると考える教員を100%にする。	・生活やいじめに関するアンケートを毎月2回実施し、生徒の実態把握に努める。 ・人権集会の取組や道徳教育の推進、GUを基にした集団づくりの推進を通して望ましい人間関係を育む。 ・教職員を対象に実践的な校内研修を1回以上、実施する。	A	・アンケートでは、「相手思いやり、受け入れることができています」と回答した生徒が97%であった。また、「SCやSSWと保護者、担任との連携を図ることができた」と回答した教職員は98%であった。 ・2回の生活・いじめアンケートの実施により、早期発見につなげることができた。	・人権集会や道徳教育、望ましい集団づくりについての取組をさらに増やしていきたい。 ・生活・いじめに関するアンケートの確実な実施とさらなる活用を通して、いじめの早期発見と早期対応につなげていきたい。

③ 健やかな「体」を鍛える

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○活き活き部活動の推進	自分の健康や体づくりに関する意識を高めることができていますか。	・部活動や社会体育、文化活動に積極的に取り組む生徒を80%以上にする。	・部活動の顧問を複数体制とし、常に臨場指導を行う。 ・部活動や社会体育、文化活動の意義を踏まえた指導と適正なあり方について、保護者会、学校より等で周知する。	A	・アンケートでは、「体育・文化活動などに積極的に取り組むことができています」と回答した生徒が93%であった。 ・部活動指導は複数体制で行い、保護者会などで活動の意義を踏まえた指導と適正なあり方について周知することができた。	・部活動指導の意義や適正なあり方について、保護者への周知を保護者会等の場で行うとともに、学校よりや学校HPでも周知していく。 ・部活動顧問の複数体制を堅持し、常時、臨場して指導できるように顧問間の情報を共有するようにしたい。
教育活動	●健康・体づくり	望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成ができたか。	・朝食をとって登校する生徒を90%以上にする。 ・基本的な生活習慣を身に付けさせ、健康意識の高い生徒を育成する。	・毎月1回、保健だよりやアンケートを通して朝食をとることの意義の理解と啓発を行う。 ・家庭科や学級活動の授業を通して、朝食の大切さを再認識させる。	B	・アンケート結果、朝食を食べた登校している生徒は93%であった。また、保健だよりやアンケートで食育の意義や理解の啓発を図ることができた。 ・学級活動等の授業を通して、食育の大切さを指導している教職員は昨年度に比べ減少している。教職員の意識向上が課題である。	・健康意識の高い生徒を育成するために教科における指導や学級活動での授業を学年共通で実施しながら意識の向上を目指したい。 ・保健だよりや学級通信などを通して、基本的な生活習慣(早起、早起、朝ご飯)の大切さについて理解と啓発を継続していく。
		家を出て再び帰るまでの生徒の安全確保ができていますか。	・登下校時の交通ルールやマナー、学校生活のルールやマナーが守られている生徒を80%以上にする。	・各学年安全指導担当、生徒会担当、部活動顧問を中心として登下校指導を行う。学年、学期の初めには集中した登校指導を行う。 ・生徒指導や各学年計画に基づき、昼休みの巡回指導を行う。	A	・アンケートでは「登下校時の交通ルールやマナー、学校生活のルールやマナーが守られている」と回答した生徒は、95%であった。 ・毎月の安全点検の取組、安全指導担当、部活動顧問を中心とする登下校時の交通指導の取組、生徒指導担当を中心とする昼休みの巡回指導を通して、生徒が生活上のルールやマナーを守るとする意識向上につながった。	・安全指導担当を中心に登下校時における交通指導を定期的に行い、交通ルールやマナーの徹底を図るようにつなげていきたい。 ・生徒会や学年集会、学級活動の授業の際にも交通ルールや学校生活上のルールを遵守できているか、常に内省させる指導の徹底を図りたい。

④ 教師集団の「組織力」を磨く

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	職員がキャリアステージやワークライフバランスを考慮し、長期、中期、短期の自己目標を設定し、勤務時間を意識した業務遂行が実現できているか。	・週1日以上(部活動休業日、第1水曜日のノ部活動デー、第3日曜日の県下一斉部活動休業日、定時退勤日の6時台閉庁、夏季休業中の閉庁日)を完全実施する。	・週1日以上(部活動休業日、第1水曜日のノ部活動デー、第3日曜日の県下一斉部活動休業日、定時退勤日の6時台閉庁、夏季休業中の閉庁日)を完全実施し、改善を呼びかけることで、職員の意識改革と働き方改革を図る。	A	・週2日以上(部活動休業日、第1水曜日のノ部活動デー、第3日曜日の県下一斉部活動休業日)を完全実施することができた。 ・定時退勤日の6時台閉庁や夏季休業中の閉庁日の完全実施を通して自らの働き方について見直すことができた教師が増えている。	・定時退勤日の6時台閉庁を呼びかけ、遵守できるように互いに声をかけ合う。また、それ以外の日も「本日の退勤時刻は何時か」と職員室前方に掲示して、終了目標時刻を意識してもらうよう意識化を図りたい。
学校運営	○教職員の資質向上	ベテラン教師、ミドルリーダー、若手教師がそれぞれの役割を自覚して、教育活動に取り組んでいるか。	・全職員が、各キャリアステージに応じて「育てる」意識や「学ぶ」意識をもちながら、ペアやチームとして教育活動を行っている割合を80%以上にする。	・校務分掌や学年行事、学校行事をベテラン、ミドルリーダー、若手教師の組み合わせを行い、信じて任せ、若手教師の成長を促す。また、ベテランや中堅の技の伝承するとともに、若手教師の育成を図る。	A	・「育てる」意識や「学ぶ」意識をもちながら、ペアやチームで教育活動している」と回答した教師は89%であった。 ・ベテラン、ミドルリーダー、若手教師の組み合わせを校務分掌や学年行事等を行っているものの、ベテランや中堅の技の伝承が十分にできなかったところもある。	・「育てる」意識や「学ぶ」意識をもちながら、ペアやチームとして教育活動を行っている教師の割合を9割にする。 ・ベテランや中堅の技を伝えるための研修会を計画的に実施し、若手教師の育成を図りたい。

⑤ 生徒を取り巻く「環境」を整える

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○危機管理体制の確立	安全・安心な生活環境を確保できているか。	・安全で安心して過ごせる学校だと実感できている生徒を75%以上にする。 ・教職員の危機管理に対する意識の高揚と対応能力の向上を図る。	・避難訓練や安全点検を実施し、生徒や教職員の安全の確保、交通事故、生活事故防止に対する意識を高める。 ・危機管理対応の職員研修を年1回以上実施し、危機の未然防止に努める。	A	・アンケートでは、94%の生徒が「学校では安全で安心して過ごすことができています」と回答した。 ・危機管理対応の職員研修を通して、意識が高まると同時に具体的な対応能力も向上している。	・目的に応じた避難訓練の開催や定期的な安全点検を確実にし、生徒の交通安全防止、生活事故防止の意識向上をさらに高めたい。 ・危機管理対応の職員研修を年1回以上実施し、具体的な対応能力の向上に生かしていきたい。
		○情報発信	保護者に学校の教育活動を理解してもらえたか。	・学校だよりは毎月発行、学校HPや携帯サイト(マニエール)では毎月2回以上情報発信を行い、家庭・地域、諸機関との連携を密にする。	・校長の教育方針や小中連携の取組、いじめ防止や学力向上の取組など学校の特色ある取組を、学校だよりだけでなく、HPや携帯サイト等活用し情報発信を図る。	A	・「学校は、学校だよりや学校HP、携帯サイトを通じて、情報発信を積極的にしている」と回答した保護者は89%であった。 ・地域や保護者の意見に耳を傾け、授業参観日などの設定や授業の様子や学校の様子を知る機会をさらに増やす必要がある。
教育活動	○特別支援教育の充実	特別支援教育担当者が生活補助員や養護教諭とも連携し、チームとして連携し、組織的に取り組む体制ができていますか。	・特別支援教育コーディネーターと養護教諭を中心として特別支援教育部会を月1回以上開催し、困り感のある生徒の共通理解に努め、個々の生徒のケアメントを行い、支援の充実を図る。	・短期、中期、長期の目標を設定し、「支援計画・指導計画」を作成し、計画的に支援に取り組むことができた」と回答した教師は、昨年度からわずか1%のアップに留まった。 ・特別支援教育部会を定期的に開催するとともに、生徒の共通理解と関係機関との連携を図ることが課題である。	B	・特別に支援が必要な生徒に対して、「支援計画・指導計画」を作成し、計画的に支援に取り組むことができた」と回答した教師は、昨年度からわずか1%のアップに留まった。 ・特別支援教育部会を定期的に開催するとともに、生徒の共通理解と関係機関との連携を図ることが課題である。	・特別支援教育部会を週1回定期的に開催し、個々の生徒の情報を交換しながら支援計画や指導計画の作成と実践に取り組む。 ・必要に応じてSCやSSWとも意見交換しながら、特別支援学校から講師を招くなど、関係機関との協働体制づくりをさらに進めたい。
		○不登校対策の推進	不登校及び不登校傾向の生徒に対する体制づくりができていますか。	・教育相談主任、副主任を中心に「つなぐ」動きかけの「キープ」に、「学校復帰プラン」を策定し、全職員が共通理解したうえで、不登校の生徒や家庭に働きかけることにより、不登校生徒の縮減を図る。 ・新たな不登校生徒を出さないための未然防止に努める。	・「電話訪問」や「担任+1」の家庭訪問、保護者同伴の「別室登校」など、保護者と話をする機会を積極的に作り、保護者の意向を聞きながら、チームで対応していく。 ・進路学習にも取り組み、将来に向けての見通しをもたせるよう努める。 ・学校適応指導教室や関係機関との連携を図る。	A	・不登校傾向や困り感のある生徒に対して、関係職員や関係機関との連携や協議意識をもつことができた」と感じている教師は昨年度より14%も上昇した。 ・教育相談部会を中心に生徒の状況に応じてチームで対応する体制ができています。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
学校運営	○小中一貫教育の推進	教科「日本語」の取組を核として、小中9年間を見通した学びと育ちの系統性が図られたか。	・生活規律と学力向上、教科「日本語」の系統性をもった指導を行うため、小中合同推進委員会を年3回開催し推進する。 ・教科「日本語」の授業公開を参観日に位置づけ、小中一貫教育研究会では各学年で教科「日本語」の公開授業を行う。	・生徒指導担当、研究主任、教科「日本語」コーディネーターと小中一貫教育コーディネーターとの連携を密に行う。 ・小学校との交流の推進等を通して、小学校から中学校へのスムーズなつながりを図る。 ・授業研究会等を通して、成果と課題を明らかにし指導の改善にあたる。	B	・生活基盤や学力向上、授業づくりの各部会で系統性をもった指導を行うための小中合同での研修会を開催することができなかった。 ・「小中合同の研修会や授業研究会を通して、成果と課題を明らかにし、今後の指導改善に役立った」と回答した教師は、昨年度より減少した。 ・小中一貫教育コーディネーターや生徒指導、教育相談、特別支援教育などで小中連携は密に行うことができた。	・各部会で系統性をもった指導を行うために各校の代表者会議を学期に1回は開催する。 ・夏季休業や冬季休業を利用して研修会を開催し、小中の全教員が互いの課題について意見交換する機会をつくる。 ・生徒指導や教育相談、特別支援教育などの面で小中連携をさらに密にするため、各校の担当者会議を設定する。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

学校教育目標「西中一心～夢の根っ子を育てる～」のもと、確かな「学び」、豊かな「心」、健やかな「体」を鍛え、教師集団の「組織力」を磨き、生徒を取り巻く「環境」を整えるように学校運営を行った。校内研究では、県の指定を受け全教科・全領域において「活用力」を高める学習指導の工夫・改善に2年間に渡って取り組み、実践してきた。また、その成果を授業公開という形で発表することができた。保護者アンケートからは、本校の教育活動に対しておおむね好意的な評価をいただいた。また、教職員はチーム一丸となって学校教育目標や重点目標の実現に向けて取り組むことができています。生徒指導や学習指導においても共通理解のもと実践ができたものと理解している。次年度は、課題となっている特別支援教育の推進体制づくりと教員の専門性や指導力の向上のために校内研修の充実を努めていきたい。また、生徒の基礎学力向上、活用力向上のため授業研究会や校内研修を通して授業改善をさらに推進していくつもりである。

●は共通評価項目、○は独自評価項目